

6-1 「風刺精神」の健全

マーク・トウェインは非凡な作家でした。誰もそれまでにやったことのない書き方で人びとを楽しませ、弱い者を擁護し、当時の作家としてはめずらしく奴隷制や人種差別を公然と非難しました。

☞ *Kindness is a language which the deaf can hear and the blind can see.*

やさしさとは、耳の聞こえない者でも聞くことができ、目の見えない者も見ることができる言葉なんだ。

—Mark Twain (→p.035)

文体やストーリーテリングも斬新でした。淡々と物語をすすめていたかと思うと、絶妙のタイミングで急カーブを切り、それまでとはまったく違う展開をくりひろげるのでした。

発想も奇抜でした。きびきびとしたユーモアは、人を笑わせながら、同時に人生の皮肉を描きだしました。その文学的風貌は、無邪気ないたづら小僧の仮面をかぶった、ポーカーの勝ち方をぼそっと教えてくれる老人のようです。

☞ *Man is the only animal that blushes. Or needs to.*

人間は赤面する唯一の動物である。いや、赤面せざるをえない、かな。

☞ *Life would be infinitely happier if we could only be born at the age of eighty and gradually approach eighteen.¹*

もし80歳に生まれて、だんだん18歳に向かうというのであれば、人生はこのうえなく楽しいことだろう。

かつてアーネスト・ヘミングウェイ (→p.121) は、「アメリカ文学は一冊の本から生まれた。マーク・トウェインの『ハックルベリー・

フィン』だ」と最大級の讃辞を送ったことがありますが、じつはトウェインの評価が高まるのは亡くなったあとの1920年ごろです。生前、トウェインの評価がさほど高くなかったのは、東部ニューイングランドが文学の中心だったからです。とりわけボストンあたりでは、ヨーロッパの影響が強く、国内にいる逸材に目を向けようとしませんでした。ヘミングウェイは、代表的アメリカはすぐそこにいるのに、といたかかったのに違いありません。

西部出身のトウェインは、伝法なもの言いで、したたかな大らかさを披露しましたが、その影響力は小さいものではありませんでした。じっさいトウェインにインスパイアされて、ユーモア作家のジェームズ・サーバーやコメディアンのリチャード・プライヤーらが生まれだし、日本でも有島武郎や佐々木邦らが活躍しています。

トウェインは『ハックルベリー・フィン』と『ミシシッピの生活』などの傑作を残していますが、トウェインをタイムレスな存在にしているのは、そのウィットに富んだ風刺精神にあります。

☞ *Principles have no real force except when one is well fed.*

腹を満たしてくれなければ、どんな主義主張も効力を持ちえない。

笑いの賞味期限は、たいてい作者が亡くなる前か、亡くなると同時に切れてしまいますが、トウェインのユーモアはいまも不思議なくらい新鮮です。それは彼の風刺精神が普遍的な要素をもっているからでしょう。

☞ *Make money and the whole world will conspire to call you a gentleman.²*

お金持ちになってごらん下さい。誰もが申し合わせたように、あなたをジェントルマンと呼んでくれますよ。

語句注

1. infinitely 「大いに・限りなく」(比較級を強調) gradually 「だんだんと・徐々に」 2. conspire to do 「(種々の状況などが) 重なり合って~する」

6-2 「ユーモア」という品格

欧米では、恋人や伴侶を選ぶ際、ユーモアのセンスがあるかどうかをことのほか重視します。じっさい、未婚女性たちは、結婚条件のトップランクに「ユーモアのセンスがあること」をあげています。交際相手から「あなたはユーモアのセンスがまったくない」(You don't have a sense of humor whatever.)といわれたら、二人に未来はないと思って間違いありません。

ユーモアとは何か。

それは、人をなごませる上品なおかshimのこです。ジョークとユーモアは似ていますが、下品なジョークはあっても、下品なユーモアはありません。それは、ユーモアが高い知性と気高い品格の証しだからです。

☞ *Humor is falling downstairs if you do it while in the act of warning your wife not to.*¹

ユーモアとは、妻に階段から落ちないように言いつつ、自分が階段から落ちてしまうこと。

—Kenneth Bird (ケネス・バード: 1887-1965) イギリスの漫画家

見事な定義です。

ユーモアが教養や品性を感じさせるのは、自分を貶(せと)めて笑いの対象とするという、相手に対する気づかいがあるからです。

「ミステリーの女王」とうたわれたアガサ・クリスティは、再婚した際、「なぜ考古学者と？」という質問に、次のように答えています。

☞ *An archeologist is the best husband any woman can have; the older she gets, the more interested he is in her.*²

考古学者は、どんな女性にとっても最高の夫ですわ。妻が古くなればなるほど、興味をもってくれますもの。

—Agatha Christie (アガサ・クリスティ: 1890-1976)

イギリスの推理作家

ユーモアのセンスが際立っています。

面倒くさいことを好む人などいませんが、アガサは面倒なことが人一倍嫌いだったようです。こんな卓見も披露しています。

☞ *I don't think necessity is the mother of invention — invention, in my opinion, arises directly from idleness, possibly also from laziness. To save oneself trouble.*³

私は「必要は発明の母」だとは思いません。思うに、発明はもとはといえば「横着な気持ち」、いわば「怠惰」みたいなものから生まれるものではないでしょうか。面倒くさいことを避けるためにね。

Necessity is the mother of invention. (必要は発明の母) は17世紀中葉に用いられるようになった格言で、ジョンサン・スウィフト(→p.136)の『ガリヴァー旅行記』にも見ることができますが、アガサは「怠惰こそが発明の母」だということです。なるほど、考えてみればこちらのほうが説得力があります。これもユーモア精神が生み出した名言といえましょう。

語句注

1. in the act of ~ing 「～している最中に」 warn A not to do 「～しないように警告する」 2. archeologist 「考古学者」 3. arise from A 「Aから生じる」 idleness 「無為・何もしていない状態」 laziness 「怠惰」 save A trouble 「Aの手間を省く」